

---

# 機動戦士ガンダムGGENERATION-月光蝶の羽音

フリル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機動戦士ガンダムGENERATION - 月光蝶の羽音

### 【Nコード】

N2268Z

### 【作者名】

フリル

### 【あらすじ】

これは、ゲーム【機動戦士ガンダムGENERATION】のオリジナルキャラクター達が黒歴史に介入し過去の作品である機動戦士ガンダムから様々なガンダムやパイロット達と出会い、別れ、そして共闘してゆく物語です。

## 【あらすじ】

G・FIF1982年、地球より宇宙へと出た人類は、月にて一つの発見をした…それは、月光蝶の繭と呼ばれた大きな物体である事が後に分かる。月光蝶の繭を発見した人類は科学を結集させ、月光蝶の繭を1000年掛けて解析、黒歴史と呼ばれる月光蝶により無かったことにされた歴史、MSと呼ばれる人型兵器、そしてそれにより運命を左右され戦った戦士たちの記憶を得た。そして同時に人類は、自身らも月光蝶により滅びる事も悟る…。滅びる事を恐れた人類は、月にある月光蝶の繭を月の地下へ封印し、管理するようになる。そのある日。人類は月光蝶の繭から一つの滅びない方法を導きだした。それは…戦う事。黒歴史へと介入し、誤った記憶を正し、無かったことにされた歴史を復元し思い出す事。それが月光蝶の繭により与えられた使命である。使命を受けた人類は、月光蝶の繭をシステムに取り入れ黒歴史へと介入する事の出来るシステム【ジエネレーションシステム】の開発と、黒歴史の中で戦う戦闘部隊【ジエネレーション・フォース】を設立するきっかけとなった。

この物語は、ジエネレーションシステムが開発された年から始まる…。

## EP - 1【エリス・クロード】

G - F I F 2 1 5 0 年 4 月、ジエネレーションシステムを完成させた人類は、ジエネレーションシステムのある月から一番近いコロニー【F - 1 0 1 0】に黒歴史介入部隊【ジエネレーションフォース】を集結させ、最初の介入をしようとしていた。

コロニーとは、増えすぎた人類が住まうための言わば偽物の地球の事である。

コロニー【F - 1 0 1 0】の中にある小さな公園に、この物語の主人公となる少女はいた。少女の名前はエリス・クロード、父親譲りの金色の髪の毛に緑の瞳、母親譲りの端正な顔立ちをした少女は、学校を途中で早退しこの公園のベンチの上で趣味の読書をしながら帰宅までの時間を潰していた。

「はあ…」

本に疲れたエリスは小さなため息を漏らす。そして手元の新デザイアの携帯画面に目を向けて時間を確認した。まだ帰宅時間には4時間以上ある。実家には母親がおり、今すぐ帰ると早退した事がバレ、怒られてしまうからだ。学校では優秀な成績であるエリスではあるが、そんな事でわざわざ心配をかけさせたくはない。

しかしエリスは今日、学校を早退したい理由があった、それは…。

エリスは目を横に向ける。どこまでも続くコロニーの見慣れた景色、空には偽りの空が広がる。しかし視線の先には巨大なオレンジ色を

した建物がある。それは正確には建物ではない船である。現在この  
コロニーには、ジェネレーションフォースと呼ばれる部隊が駐留し  
ており、あのオレンジ色の艦はジェネレーションフォースの旗艦。

「【キャリアベース】…」

【キャリアベース】黒歴史内に存在したクラブ級とよばれる戦艦  
のデータをベースに、ジェネレーションフォース用に改良し簡易且  
つ練習用に造られた戦艦である。エリスは忌々しそうにキャリアベ  
ースを睨みその内に諦め、再び本に目を戻した。

エリスが学校を早退した理由、それにはジェネレーションフォース  
が関係していた。ジェネレーションフォースは政府の作り上げた組  
織であり、国民はその組織に積極的に協力するというものである。  
その協力というのは人員である、ジェネレーションフォースは優秀  
な人員を探していた。その優秀な人員とは兵士であるが、ただの兵  
士ではない。ニュータイプと呼ばれる素質のある人間を探している  
のだ。その査定をする検査がエリスの学校で行われている。エリス  
は自分がニュータイプだとは思っていないしかしエリスは戦争には  
興味が無かったのだ。

「この世界の滅亡を守るために、他の歴史に介入して武力でもって  
歴史を正すなんて間違ってるわ…そんなのただの人殺しよ…」

エリスは思った事を口に出して憤りを現した。エリスは過去のジェ  
ネレーションシステム導入による戦争で父を失っている。そのため  
に戦争とは憎しみの象徴であった。

「どうかな…」

隣から男性の声がした。エリスが顔を向けると、そこには一人の男がいた。灰色の頭に黒いジャケットを羽織り目にはサングラスが付いている。

「…!？」

エリスは突然の男の出現に驚いて飛び上がるように立ち上がる。

「驚かせてしまったか…悪い事をしたな」

男そのまま、驚いた拍子に落としたエリスの本を拾う。

「だ!!だれですかあなた!!返してください!!」

エリスは慌てて男の手にあった自分の本を奪い取る。男は頬をかいてサングラスを外す、サングラスの下からは堅実そうな瞳がかいま見えた、瞳は鷹のように鋭く刺すようだったのをエリスは感じた。

「オレはジェネレーションフォースの隊長、マーク・ギルダーだ」

マークは手を差出し、躊躇するエリスの手を強引に取り握手する。

「…エリス・クロードです」

エリスは嫌悪の感情でマークを睨み、手を話すなりハンカチで拭う。

「知ってるさ、優等生」

マークは苦笑しながらジャケットのポケットから電子端末を取り出す。

「エリス・クロード、地球のトクラン共和国生まれ、トクラン内戦後、宇宙コロニーF-1010に移民、現在はF-1010内にあ  
るグラウシア中学校に通学1年生から3年生まで首席、年齢は15  
歳…身長と体重は…」

「言わないで下さい」

一通りいい終えたマークは、電子端末の電源を切りジャケットのポケットにしまう。

「それで…わたしに何の用ですか…」

エリスの言葉にマークはゆっくりとベンチに腰を降ろす。

「オレは君をスカウトに来た、ジェネレーションフォースとして共に戦う仲間として…」

マークの言葉に、エリスは胸を鷲掴みにされたような苦しい感覚にとらわれ目を見開く。

「そ…そんなの！」

動揺したエリスにマークは微笑み掛けた。

「残念だが既に決定されている、君の母親にも話はしてきた…喜んで君を差し出すそつだ」

マークはそうして再びジャケットのポケットに手をいれ、今度は手

配書をエリスに見えるように渡す。

エリスは手にとりその文面をまじまじと眺めた、そして肩の力が抜け、目眩を起こしそうな錯覚にとらわれる、逃れようのない事実があるからだ、母親のサインという、決定的な…。

「…母のサインです」

「当然だろう？、ジェネレーションフォースがわざわざここに旗艦と共に来たのは、ジェネレーションシステムがジェネレーションフォースに必要な逸材として君を選んだからだ、でなければ二日前に介入行動が始まっていた」

では…エリスは思考を凝らした。そして回想する…ジェネレーションフォースはこのコロニーに停泊したのは自分の責任だったのではないか？では、母親がサインしたのは何故だろうか？彼女は父が死んでから気が狂うようにジェネレーションシステムの開発に携わっている研究者だった、ジェネレーションシステムが選んだと言えばサインするだろう。

「さあ、そろそろ時間だ…行こうか」

「嫌です、わたしはジェネレーションフォースへの参加を拒否します」

エリスはマークに対して怒鳴るような声色を絞って出した。

「わたしは戦争なんてしたくない！人を殺すんですよ！？」

「オレだって撃ちたくはないさ」

しかしマークは冷徹な顔になる。

「だが戦地で相手にそんな理屈は通用しない、撃たなきゃやられる…だから撃つ、黒歴史の中には殺さない戦法を取ったパイロットも数多くいるが、オレにそんな技術は必要ない」

エリスは首を横に振り、前に出る。

「わたしはまだ15歳です！！戦争なんて！！」

「10歳で戦地に身を投じた子供なんてやまほどいるさ、戦争に年齢は関係ないそれに君は…」

マークはじつとエリスを見つめた。エリスはその迫力に黙り込んでしまう。

「ニュータイプだ、ニュータイプならば尚更年齢は関係ないさ」

マークの言葉にエリスは更に噛み付こうとした。

「隊長ー」

そこに一人の青年がやって来た。マークはエリスからそちらに顔を向け、エリスも青年を見た。青年は額に灰色のバンダナを巻いており、マークと同じジャケットを着ている。

「なにしてんすか…」

青年は不満そうにマークを睨んだ。マークは苦笑を浮かべる。

「何をしている…か、女学生と他愛ない会話をしているだけだ」

マークは冗談混じりに言えば、青年は頭をかく。

「またまた冗談きついつすよ」

エリスはマークに顔を向ける。

「誰です？」

エリスに聞かれたマークは青年から顔をエリスに戻す。

「奴はラナロウ」

「【ラナロウ・シェイド】だ、ジェネレーションフォースでパイロットをやってる」

ラナロウはエリスに手を差し出す。気前の良さそうな好青年な様子が伺えた。

「エリス・クロード…」

握手しようとしたエリスの手を掴んで引き、同時にエリスの腹部を衝撃が突き抜けた。

「…うぐっ！」

エリスは突然の衝撃で意識が暗くなる。その薄れ逝く意識の中で、初めて殴られていた事を確認した。

「ラナロウ!!」

マークはラナロウに対して怒鳴るが、ラナロウは大して気にする様子なく気絶したエリスをさっさと肩に担いだ。

「んな事よりさっさと行こうぜ…あまり時間を無駄に出来ねえ…」

マークは頬をかいてから渋々ため息をはきながら頷いた。

「そうだな…」

そして公園の外に停車していた車に向かう。

「ラナロウ」

向かう途中にマークはラナロウを呼び止める。

「まだなんかあるんすか？」

嫌そうな態度を表すラナロウにマークは苦笑した。

「女の子に拳は良くない」

「……………」

ラナロウは終始黙り込み、小さくうなずいてから車へ向かった。

## EP・2【シミュレーション】（前書き）

ラナロウにより、無理矢理誘拐されたエリスは、キャリアベースの  
医務室で目を覚ますのだった。

## EP・2【シュミレーション】

「う…ん…」

体が重い、そんな感覚がエリスの精神を覚醒させる。石のように重く硬い瞼をやつとの事でこじ開け、まばゆい光りが闇に慣れた瞳を貫く、それはまるで槍に貫かれたような痛みと共に、景色が広がって行く。

「あ！起きた起きた！」

エリスの目の前に癖毛の目立つ女の子の顔が浮かび上がる。女の子は仕切りに誰かを呼んでいるようである。

「はいはいはい！」

奥からそんな声がした。そこでエリスは体を起こして辺りを見回す。辺りには清潔感のある白いベッドが並んでおり、白いパーテーションが辺りを囲う。まるで医療施設じゃないか…エリスはそう思うと同時に記憶が覚醒してくる。

「確かわたしは…公園で…」

公園での出来事を思い出し、一気に焦りが生まれる。

「起きたようだね」

現れたのは室内だというのに帽子を被り隙間から金髪のポニーテールがかいま見える。筋肉質な女性だった、ジャケットはマークヤラ

ナロウと同じだが、ズボンは作業ズボンのようなダボダボした感じの服であり、油による汚れが目立っていた。

「あたしゃ【ケイ・ニムロット】ジェネレーションフォースのメカニックさ」

ケイは素直にエリスの手を取り握手を交わす。

「おー！ストライクウウ！なんちゃって」

となりで先程の少女が騒いできた。

「そいつは【クレア・ヒースロー】、ただの馬鹿だからほっとけ」

ケイは呆れた調子で手をしっしつと振ってクレアを追っ払う。

「あの…」

エリスは、ケイに顔を向ける言葉を漏らす。

「お察しの通り、ここはキャリーベースの中さ…ラナロウに誘拐されて来たんだってね、可哀想に」

エリスの記憶にラナロウに殴られた事が思い出される。

「そうでした！なんですかあの野蛮な人は！！それとわたしを家に帰して下さい！！」

エリスにまくしたてられ、ケイは頬をかく。

「あいつは元々傭兵あがりだかんなあ…まあ、後であたしがぶん殴つといてやるよ」

「坊やだからさ！なんちゃって〜！」

途中でクレアが割って入り椅子を持って来て座る。

「じつとしてる！大人しくしてる！口を開くな！！！」

ケイはそういつてクレアをひっぱたき、叩かれたクレアは頭を押さええて蹲る。

「こいつがエリスより年上だなんてなあ…！」

ケイは更に呆れた様子で親指でクレアを指差した。

「わたしは…帰れるんですか？」

エリスが聞けば、ケイは何かを言おうとし。

「それは無理な質問です…！」

パーティーション越しに綺麗で透き通る声が響いた。するとパーティーションの隙間から女性が顔を出した。黒一色の制服に白い肩掛けをみにつけた女性だった。

「マリア！なにも誘拐なんてしなくたって！」

「少佐を付けなさい、ケイ・ニムロット」

マリアと呼ばれた女は一言でケイを黙らせ、エリスの前に行き、一度敬礼した。

「わたしは、ジェネレーションフォースと共にキャリアベースに同乗します地球連合軍少佐【マリア・オーエンス】です」

拳手していた手を下げ握手を求める。

「何故、地球の軍人が？」

エリスの問い掛けにマリアはキョトンとする、が、すぐに確りと両目でみすえた。

「連合軍は今回のジェネレーションシステムにおける黒歴史への介入を、良くは思っていないません…コロニー側が黒歴史の知識から開発したMSで地球に進行するのではないか？なんて言葉も囁かれています。」

マリアはそこで一呼吸置いた。ケイは何かいいたそうな顔をしている。クレアもとなりで退屈そうにしていた。

「そこで、わたしが同行し…あなた方ジェネレーションフォースの動きを探るよう命ぜられ今にいたります」

そう言葉を切ると、マリアは脇に抱えていた包みをエリスに差し出した。

「これは…？」

不審をいただいたエリスは、受け取った包みを膝に置き、ゆっくり開いた。それはジェネレーションフォースのジャケットとズボンだった。

「動けるならば着替えなさい、外で待つてるわ」

マリアはそれきり外へ出ていった。

「たく…せつかちなやつ…」

「あたし、あいつ嫌い」

ケイは隣のクレアの頭をポンポン叩き、エリスに目を向けた。エリスはジャケットを手にしたまま動かず震えていた。

「わたしは…兵士なんかには…」

「決めるのはあんたよ、だが今は袖を通すしかない…袖を通さないと今度は勾留されることになっちまうんだ」

「そんな！！わたしは悪い事なんてしてないのに！！」

エリスの反発にケイは欠伸程の余裕を見せた。

「あたしにとつちゃ関係ねえが…ジェネレーションフォースはあんたが必要なんだとさ…別に戦争なんてしなくて艦にのつてりゃそのうち帰れるさ…」

「黒歴史は触れてはならない過去です。それに介入するなんて！」

「仕方ねえだろ？そういう国なんだからよ」

ケイは即座に流し、エリスは黙ってジャケットに袖を通し、ベッドから立った。

「来ましたか」

外ではマリアが腕をくんだまま壁にもたれかかり立っていた。

「この艦を案内します…ついてきてください」

マリアは冷たく言いながらさっさと早歩きで歩いていった。エリスは後ろを着きながら窓を見る。外には無限の宇宙が広がっていた。

「え？…ここは！？」

「月の付近、B 3エリアよ…もうじき黒歴史への突入が開始されるわ」

マリアも目を宇宙に向けた。

「じー！冗談じゃないです！なんでわたしもなんですか！！」

「うるせーな、ぐちぐちうぜえぞ…」

食堂からバンダナを巻いた忘れもしない、ラナロウが顔を出した。

「あなたは…」

エリアはラナロウをみるなりマリアの後ろに隠れた。

「なんだてめえかよ…」

ラナロウは愛想悪くエリスを視線から外し、それからマリアを睨む。

「おい軍人、この船ででかい面してるんじゃないねえ…目障りなんだよ」

ラナロウの言葉にマリアの手に力が籠もる。

「何をしているラナロウ」

奥からマークが顔を出し、マリアと終始見つめ合う。

「…マリアっ」

「マーク!？」

マリアとマークの顔色が変わり、ラナロウはキョトンとした。

「久しぶりじゃないか、どうだ軍は？」

「あなたが抜けてから目に余るわ…あなたこそ傭兵は止めたの？」

二人は深く会話を始めてしまった。入り辛そうになったラナロウは食堂に帰ってしまった。

「あの…二人は…」

エリスは間に割って入り聞いた。

「軍の同期だ」

「恋人とかじゃないわよ？」

マリアとマークは息の合ったチームワークのような会話をした。

「それじゃ、キャリーベースに乗り込んだ軍人はお前か」

「ええ…いまはエリスさんに艦内を案内していたの」

マークは頷く。納得したように腕を組みエリスに目を向ける。

「強引に連れてくるようなやり方をしてすまなかった…」

マークはそう頭を下げた。エリスとしてはそこまでされると目くじらを立てるわけにも行かずに頭を軽く下げた。

「いえ…」

重い空気が流れる。だれもが金縛りにあつたかのように動かないその中で一番最初に動いたのはマリアだった。

「さ…さあ！艦長に会いに行きましょう？ブリッジに」

「それならオレも行くこう、マリアの様子を見ると、お前もあのコロニーから乗った口だろう？」

「クラブ級の戦艦は一通り乗っていますから、貴方の助けはいりませんよ」

「そういう訳にはいかな、このキャリーベースはクラブ級とは違うのだから」

マークはそう言って組んでいた腕を解いて歩きだす。

「ついてこい」

マークに言われるがまま、マリアとエリスはマークの背中を追い掛けた。そうしてブリッジへとたどり着く。

「艦長、新しいクルーを連れて来ました」

マークが中に入るなり凄まじいアルコールの臭いが鼻を突いた。マークが中に入るとそこには女性がいた。すらつと背が高く細い女性だった。

「ご苦労、ギルダー君」

女性はキツイ目付きで後ろの二人を見た。二人はあまりの鋭さに少し引いてしまう。

「恐がらなくていい、奴は目付きはキツイが見かけ倒しだからな」

マークが言えば女性はマークの脛を蹴飛ばした。

「ぐはっ!」

脛を押さえて蹲るマーク。それを見下す女性は冷酷な目を向ける。

「こつ見えてわたし、徒手による格闘は得意なの…見かけ倒しで悪かったわね？」

そして女は顔を此方へ向ける。

「わたしはニキ、【ニキ・テイラー】このキャリーベースの副艦長をしています」

ニキは鋭い目付きを崩して笑みを向ける。

「副艦？…艦長殿は？」

マリアが聞けば、ニキは顔を横に向ける。

「ぐがー…ぐがー…」

艦長席では中年の男が酒の瓶片手に居眠りをしていた。

「職務中に…飲酒だなんて…」

マリアは少し瞳を潤ませ。エリスは我慢しきれずに鼻をつまんだ。ニキも苦笑しながら顔を戻す。

「他のクルーを紹介するわ」

ニキはそう言ってブリッジの前にある操舵席に座る男の横に行った。

「お！なんだ新人か？二人とも可愛いねえ！特に右の金髪のー…」

「操舵に集中なさい!!」

ニキに頭を叩かれた男は軽口を止める。

「こいつは【エルンスト・イエーガー】操舵の腕は一人前だけど女の敵よ」

ニキは女の敵を強く強調した。次にニキはその横にある席へ向かう。そこには二人の男女がいた。1人は褐色の肌をと髪型が特徴的な少女と、大きなインカムをつけた少年だった。

「シエルド」

少女にシエルドと呼ばれた少年はエリスの方に振り返り、インカムを外す。

「ぬあ!」

シエルドは突然声を荒げ立ち上がる。

「まさか!…新人!?!」

シエルドは素早く座席を飛び越えてエリス達の元へよじ登る。

「よっしゃあー!!…ついにオレの出番!!パイロットデビュー!!…通信は君にパー!…」

そんなシエルドの頭に雷鳴のようなマークの拳骨がふりそそぐ。

「いつてええ!!」

「パイロットになりたいきゃ、シユミレーションテストで50点以上とってみろ…話はそれからだ」

マークに言われたシエルドは落ち込むように座席にもどる。

「あー、オレは【シエルド・フォー・リー】よろしくな」

シエルドは眩しい笑顔を向けてきた。その横にいた少女はエリスを睨む。

「【レイチエル・ランサム】よ…」

レイチエルはそれきりシエルドに体を向け、シエルドの頭を気にして撫で始めた。

「そして俺が【ゼノン・ティーゲル】だ、よろしくなお嬢さん方」  
寝ていた筈のゼノンは身体をだるそうにこちらに向けた。

「今日付けでこちらへ配属になりました。地球連合軍少佐、マリア・オーエンスです」

マリアは軍人らしい綺麗な敬礼を見せ姿勢を正す。しかしゼノンは頬杖をついた。

「かゝお堅いねえ、軍人のお嬢さん！まるで昔のどっかのバカだ」

ゼノンはさりげなくマークに目を向け、マークは素知らぬ振りをし

た。

「は…はあ…」

「肩が凝るだろ？リラックスしてくれよ、少佐殿」

それきりゼノンはマリアに顔を向けずにエリスを見た。

「あ…」

エリスは人見知りな訳ではない。単純に迷っていたのだ。

「この状況でもまだ迷いの色か…綺麗な瞳をしている」

ゼノンは真っ直ぐにエリスを見つめていた。

「エリス・クロードです…」

エリスはゼノンから目を反らして名前を絞りだした。

「マーク、少佐殿とエリスちゃんにシュミレーションテストをしてくれ」

ゼノンはそれをいいながら身体を進行方向へとむける。

「了解」

マークはエリスとマリアを連れて外へ出ていった。

「むっふふふ」

居なくなるのを確認してゼノンは笑いだす。

「エリスちゃんの成長が楽しみだな、なあ？イエーガー？」

前でイエーガーはガッツポーズ、同時にニキの回転回し蹴りが二人を制圧した。

「この！ロリコン共が！！業務しろ業務！！」

そんな事件などしりもしないエリスと MARIA はMSドックに来ていた。

「これがドック、そしてジェネレーションフォースの最新鋭主力MS【トルネードガンダム】だ」

マークに紹介された MARIA とエリスはトルネードガンダムとよばれた兵器を見上げる。紺色を主体にオレンジ色を織り交ぜたトルネードガンダムのデザインは美しく、兵器であることを忘れてしまう。トルネードガンダムはドックに二機あった。

「たった二機だけ…？」

MARIA は小さく呟いた。

「二機で十分さ、エリス」

マークに呼ばれたエリスは歩み寄り見上げる。

「後ろの機体はお前のトルネードガンダムだ…いつでも出撃出来るようにしておけ」

エリスは目を見開いて驚きを現した。

「なに…言ってるんですか…わたしは」

「コロニーでのMS大会で優勝しているのだから？ならばMSが初心者なわけではない」

「わたしは戦争なんて！」

「だったら今のうちに不殺の戦法でも練習しておけ」

マークの強い言葉に押されてエリスは黙ってしまふ。

「なんだ、あんたらあたしのドックに何のようだい？」

そこにケイがやって来た。隣にはクレアもいる。

「シュミレーションテストだ、トルネードガンダム二号機のコクピットをシュミレーションテストモードに出来るか？」

ケイは渋い顔をして頷く。

「わかったわ…」

そして二号機の足元まで行き、端末を操り始める。その間にマーク達はデッキで二号機のコクピットまで上がり、ハッチを開く。

「オーケー！」

ケイが下から叫びマークは鋭い目付きでマリアを見た。必要ないとは思うがお前からだ。

「どこの部隊に監査を戦わせる部隊がいるのやら…」

マリアはため息混じりにコクピットに座り、シュミレーションが起動する。

マークはエリスを隣のコンピュータモニターの前に連れていったここではシュミレーションでのマリアの動きが移し出されている。

「戦闘レベルは最高の5だ、12機のトルネードガンダムが相手だ異論は？」

マークがコクピットのマリアに聞いた。

「相手に不足なし、1分かからないわ」

マリアの声がコクピットから帰ってくる。

そしてシュミレーションは始まった。結果的にマリアは強かった。12機もの機体に囲まれた状態で、被弾はたったの一回、腕部についたガトリングガンを避け損ねて足の装甲に擦っただけである。

「腕が少し鈍ったんじゃないか？」

出てきたマリアにマークは冷やかすように言った。するとマリアは首を横に振る。

「トルネードガンダムの性能にわたしのメール反応値が追い付かなかっただけです」

「そうか、だとしたら満点だな」

マークは、コンピュータから端末にデータを打ち込み、マリアの点数を弾きだす。98点と弾き出され、昔のゲームのようなランキングがあらわれた。一位は驚く事にクレアで100点である、二位はマークと同じ100点、マリアは三位だった。

「クレアはシュミレーションは完璧だ、しかし実戦では戦えない…あの性格だ、味方を撃つかもしれないからな…」

マークがそう告げるとマリアも頷く。

「確かに…」

「こらー！あたしは味方を撃つほどバカじゃないぞー！！」

下からクレアの声が響く。

「うそつけ！ラナロウを後ろから撃つただろうが！！」

マークがデッキから身を乗り出して怒鳴る。

「彼は、ガンダムマイスターに相応しくない…何ちゃって！」

「クレア・ヒースローー！！今からドック30周！！」

クレアを怒鳴ってから戻ってくる。

「次はエリスだ、出来るか？」

エリスは不満でいっぱいだった、何故わたしなのだろうか？という不満である。

「不満だろうが、今は我々にしたがってもらおう…」

マークはエリスの肩を掴んでコクピットに投げ入れた。

「きゃっ！」

「いるからには否応なしに戦ってもらおういいな…」

そしてシュミレーションが始められてしまう。敵はトルネードガンダム13機の部隊である。

「なんで私が…」

エリスは戸惑いのなかコックピットにいた。敵からビームを撃たれる。わざと当たれば必要ない人間と思われるだろう。そうすれば帰れる、エリスはそう思った。

【ドオン！】

「うわあああっ！！？」

ビームは右腕を擦った。瞬間、エリスの右腕に稲妻のような痛みが走ったのだ、エリスは右手を押さえてしまう。同時にゲームが中断されてマークの顔が現れる。

「いい忘れたが、シュミレーションモードのそのコクピットには、

直撃すると電流がながれるよう細工してある」

「そーそんなっ…!」

エリスは慌てコクピットから出ようとしたがコクピットを外から閉められてしまう。

「出して!!ここからだしてください!!」

必死に叫びハッチモニターを叩くエリスだが、非力な少女の腕ではびくともしない。

「出してほしけりや力を見せろ、いまの電流は挨拶代わりさ…次から直撃するたび気絶するほどの電流がながれるようにしておくからな…」

それいこうマークは回線を切ってしまう。

「そんな!マークさんっ!!マークさん!!」

エリスは必死に呼び掛けるがすぐにゲームが再開される。

「くっそおおっ!!」

エリスは素早く座席にもどる足元のペダルを踏みつけてスラスタをふかせ、上昇することでビームを避ける。そして右手を脇に伸ばしOSのモニターに切り替えキーボードを取り出す。

「……何故後退している?」

外で戦闘を見ていたマークが目を細める。エリスを示すシグナルが13機から離れていく。

「おおい！！マーク！！」

ケイの声にマークはデッキから身を乗り出す。

「どうした！ケイ！」

マークの声にケイは驚きの反応をする。

「あいつ！トルネードガンダムのOSを書き替えてるんだ！！スピードで！！」

「ばかな！戦闘中にOSを切り替えるだど！？」

「マーク！」

マリアの声にマークが振り向くと、既に五機ものトルネードガンダムのシグナルが消えていた。エリスのトルネードガンダムのすばやい攻撃にあつというまに敵のトルネードガンダムが撃墜されてゆく。

「凄い…コクピットへの直撃を避けて、武器や頭部を狙ってるわ」

マリアは撃墜されたトルネードガンダムの被弾ヶ所をあげてゆく。

「たいした反応だな…よし」

マークはワイヤーガンを床に打ち込みデッキから降りる。

「マーク？何する気？」

マークは走りながら手を振り1号機へ走ると、デッキを駆け上がりコクピットに乗り込んでハッチを閉めた。

「シュミレーション対戦だ！エリスのシステムに乱入」

1号機を起動させ設定を切り替える。

「マーク！何する気だ！？」

ケイの通信が入り、マークはニヤリと笑う。

「スーパーキーにベテランの凄さを教えてやるのさ、何人にも100点をやるわけにはいかんだろ？」

かくいうマークの手は悦びに震えていた。

「はあ…はあ…」

エリスはコクピットの中で今でも戦闘をしていた。現在はアステロイドの物資に隠れて敵を待ち伏せしていた。12機のトルネードガンダムを撃墜したため、残りは1機である。

「……………」

エリスは目を閉じて音に頼り精神を集中する。微かに聞こえるスラスト移動の音、エリスは目を薄く開きレーダーを確認する。大量

に映るデブリの熱源中で、小さな熱源があった。

「そこ！」

エリスはデブリの先の空間にライフルを発射した。

【ズキューン】

デブリのの中から顔を出したトルネードガンダムの頭部を撃ち抜き、破壊した。

「やった……」

エリスはシートに寄りかかり脱力する。そこに通信が入る。

「あ……マリアさん？」

「エリス！マークのやつが1号機であなたの訓練に乱入しちゃったみたい！」

「え？……」

ピピピ……！コクピットの右側からロックされた音が弾けた。

「くう……！」

エリスは何を思うより先にペダルを踏み込んでスラスタを吹かせて上昇する。

【ズキューン！】

エリスの機体の下を、ビームの雨が降注いぎ、デブリを破壊する。

「やるじゃないか、エリス」

画面の奥から一つの閃光がこちらへ向かってくる。

「さあっ！力を見せろ！！」

「そんな！マークさん！！」

マークのトルネードガンダムはそのまま肉薄し、エリスのトルネードガンダムに体当たりを食らわせてきた。

「うああっ！！」

トルネードガンダムは弾き飛ばされ、ダメージと認識された為にエリスの身体に電流が流れる。

「こ…このおおお！！！！」

エリスは叫びながらビームライフルを乱射する、しかしマークはまるで流れるように動きながらライフルの弾を巧みに避け、ビームサーベルを引き抜き接近してくる。

「つく！？」

エリスは素早く身を引いて左手からビームサーベルを引き抜きマ

クのビームサーベルを押さえる。

【バシィー!!】

激しい閃光、同時にエリスの機体が側面から何かに弾かれた。マークの機体に蹴られたと気付いたのはすぐだった。

「ぎい!!、つああああ!!」

流れる電流による痛みを叫ぶ事で和らげてスラスターを吹かしてマークの機体に体当たりを食らわせる。

「んなっ!...」

さすがのマークも直撃を食らい、電流の痛みで歯を食い縛る。

「くうらえええっ!!」

エリスの叫び、トルネードガンダムの腹部がまばゆく光る。

【ズビィィイ!】

拡散ビーム砲が、バランスを崩したマークのトルネードガンダムに迫る。絶体絶命、しかしマークは笑う。

「甘いなエリス!!」

マークはビームライフルを投げ捨て、ビーム砲に当たったビームライフルが弾ける。その爆風による衝撃を利用してスラスターの威力をましたマークの機体は不自然にビームの下へと潜り込み、そして

両腕の内蔵型のガトリングガンを放つ。

【ドガガガガ！！】

放たれたガトリングガンの弾の嵐がエリスを直撃する。

「うわ！！うわあああ！！」

エリスは全身を駆け回る稲妻の痛みにした打ち大きく仰け反った。

「止めだ！！」

マークは容赦なくエリスのコクピットにビームサーベルを突き刺し、止めを刺した。

「エリスさん！！」

マリアはエリスのコクピットをこじ開けた、エリスはシートに丸まるようにして気絶していた。

「マーク！やり過ぎよ！！」

マリアはインカムでマークに怒鳴ると、マークは頬をかいた。

「すまん、余りにやるもんだから熱くなった…」

「謝る前にストレッチャー！ケイ！手伝いなさい！！」

「いわれなくたって！！」

マリアに指示された通りにマーク達は動き出す。そこへラナロウがやって来た。ストレッチャーに乗せられて運ばれるエリスとすれ違ふ、ラナロウには興味がないからどうでもいいことだった。ドックに入ると、中ではケイとマークがいた。

「いつの間に足をやられていたんだ？」

マークはモニターを見つめている、それはシュミレーションモードで被弾したヶ所を示すモニターだった。

「何してんすか？」

ラナロウが行けばマークはラナロウに向き直る。

「エリスとのシュミレーション対戦の結果さ…勝ったには勝ったが…手酷くやられたもんだな…」

ラナロウは驚いた。自分ですら一撃すら当てられなかったマークに攻撃を与えたエリスに。

「んな…ばかな…」

EP・3【宇宙世紀0079】（前書き）

シミュレーショントレーニングにて、マーク・ギルダーによる手厚い歓迎を受けたエリス、しかしその間にも最初の介入が始まること  
していた…最初は【宇宙世紀0079】…

「う…」

不思議な感覚に目を覚ます。見上げた目の前には再び医務室の天井である。

「…んん」

エリスは重たい身体を起こすと、目眩のような錯覚に捉われる。それが喉の渇きと空腹によるものだという事は直ぐにわかった。

「お腹減った…」

そう一人ごとを呟き、ベッドから立ち上がるうとする、そこにはマリアが目を閉じて腕を組み座ったまま眠っていた。

「マリアさん？」

呼びかけるとマリアはパツと目を覚ました。

「あ！すみません…で、エリスさん…目が覚めたのですね」

「え…あ、はい」

マリアは安心しようとしてエリスの顔色を伺い手足に触れる。

「他に変わったところは有りませんか？」

エリスは首を横に振った。それをみたマリアはようやく安心の表情を浮かべて肩の力を抜いてからゆっくりと立ち上がる。そのとき…

【各員に通達、各員に通達、これより介入行動を開始いたします。これより介入行動を開始いたします…各員は衝撃に備えて下さい】  
アナウンスのあと直ぐに艦が大きく揺れ動いた。

「きゃあー!!」

マリアはふらついてエリスのベッドに倒れ、そして電気が消える。

「介入…まさか…こんなに早くですか？」

マリアは呟いて天井を見上げる、エリスはというと得体の知れない不安感で胸が痛んだ。暫くしていると電気が復旧する。

「うあっ!!」

直後、エリスが頭を押さえてベッドに蹲る。

「エリスさん!?どうしたの!?エリスさん!？」

マリアが横に寄り添いエリスの顔色を伺う。

「頭が…頭が痛い…何?意志が…沢山の意志が…息遣いが……」

この現象は、エリスだけではなかった。

マークの自室

「ぐああ!!…な…んだ…う」

マークは頭を抱えてベッドの上で転がっていた。大の大人でも悲鳴を挙げるほどの激痛で、マークは立つこともできない。

ブリッジ

「あああ!!」

「レイチエル!!平気か!!?レイチエル!!」

ブリッジでもレイチエルが頭を抱えて倒れこみ、シエルドが血相かいて体を揺らし顔色を伺う。

「艦長!!」

ニキはゼノンに目を向ける。しかしゼノンは落ち着いていた。

「この宇宙世紀には意志が多すぎるのである…直に良くなるから放っておけばいい」

ゼノンのやる気のない言葉に、ニキは焦りを覚える。

「しかし…」

そんな最中、ドックからも連絡が入った。

「艦長！クレアが！！クレアが！！」

ケイは軽いパニック状態で叫び、モニターにあらわれると、その後でクレアが頭を抱えている。

「艦長が言うにはほっとけば治る見たいよ！」

ニキの言葉にケイは不安そうな顔をする。

「でもよ」

その言葉を凄まじいアラート音が遮りシエルドは慌てレーザーに目を向ける。

「ニキ！そんな暇ねえみただぜ！」

イエーガーも叫び、シエルドは通信モニターの端末を操り索敵を開始する。

「センサーに感！…データ照合完了！ジオン公国軍主力戦艦！ムサイ級だとおもわれます！！」

シエルドの声にゼノンは渋い顔をし、ニキは焦った表情を浮かべる。

「く…この宙域に駐留していた部隊か！数は！？」

ニキは声を荒げ、シエルドはセンサーの感に目を向ける。

「ムサイ級2隻！MS-06?...艦長！！ザク6機の出撃を確認しました」

シエルドのまくしたてた声にニキは顔を青くしゼノンを見る。

「まずい事になったな...」

ゼノンは何かを考えるような仕草をしていた。

「ビーム砲来ますっ!!」

そうしている間にも事態は進みシエルドが叫ぶ。

「わかってんよ!!」

イエーガーは目を熱源モニターに置きながら操舵桿を思い切り左に捻る。

【ズビィィ!!】

ブリッジのすぐ横をビーム砲が通り抜けた。

「く!威嚇なしか!!」

ニキはゼノンに顔を向ける。

「第一戦闘配備...」

ゼノンに言われるがままにニキは動き、インカムを掴む。

【各員に通達！各員に通達！！第一種戦闘配備！繰り返す！！第一種戦闘配備！！】

ニキの声が艦内を駆け抜ける。それはマリアにも届いていた。

「…いきなり戦闘！？」

マリアは上を見上げたまま驚きを顔にした。頭痛が和らいできたエリスも顔を上げる。

再びブリッジ。

「艦長！」

パイロット座席に座るラナロウがモニターに現れる。

「ラナロウ君…」

「もたもたすんな！敵が来てるんだぞ！！」

ラナロウに怒鳴られるゼノンだが、全く動揺を見せずにインカムを手にする。

「ケイ君！！第一ハッチ解放だ！！1号機を発進させる！！」

ゼノンの命令にドックにいたケイは端末を操りハッチを解放する。

「発進シークエンス！！トルネードガンダム！カタパルト接続！  
発進タイミングをパイロットに譲渡！！」

シエルドの声に合わせてラナロウを載せたトルネードガンダムがデ  
ツキへと運ばれる。

「敵の数は…？」

ラナロウはコクピット内の最終調整をしながらモニター越しのシエ  
ルドを見た。

「ザクが6とムサイ級が2隻よ！」

シエルドの横からレイチエルが頭を押さえたまま現れた。

「レイチエル！無茶すんなよ！」

シエルドの声など無視したレイチエルは隣の座席に腰掛けザクのデ  
ータをラナロウに転送する。

「…ふん」

ザクのデータを受け取り、眺めたラナロウは鼻で笑う。

「雑魚じゃねえか…」

そうしてラナロウは通信を切り、それと同時にゼノンはニキに顔を向ける。

「ラナロウ君出撃後！艦を反転させ迎撃にでる！！よいな！」

「了解！！！！」

一通り調整を終えたラナロウはグローブの握りを確認し、グリップを握る。そして…

「ラナロウ・シェイド！トルネードガンダム！！行くぜ！！」

【ドオッ！！】

カタパルトがキャリーベースの中からトルネードガンダムを打ち出した。打ち出されたラナロウはすぐ様反転し、背後に迫っていた部隊に向かう。

『なんだ！？』

ラナロウのコクピットにザクからの無線が入る。

『見たことのない機体だ！油断するな！！』

『連邦め！いつの間にもこのような兵器を！！来るぞ！！』

ラナロウはあまりの敵のザクの可笑しさに笑いを堪える。

「おら！おせえんだよっ！！！！」

ラナロウのトルネードガンダムより放たれたビームライフルの光が、真っ先に最後尾のザクのコクピットを貫く。

『うわあああ！！』

貫かれたザクパイロットの断末魔と共にザクが光の玉となった。

『やられた！！なんだあの武器は！？』

「わかんねえよな！！原始人にはよおおおっ！！！！」

ラナロウは立て続けにライフルを発射し、新たに2機のザクを光に変える。

「後三機！！」

ラナロウのトルネードガンダムの背後からミサイルが迫り、ビーム砲の弾幕が形成される。

「ちい！ムサイか！」

ラナロウは的確に敵の攻撃を避けて間合いを計る。そうしている間に2機のザクが接近してきた。

『抑える！！』

「ならこれならどーだい!」

ラナロウのトルネードガンダムの腹部が煌めいた。

『な!』

この時の彼らはしらなかった。拡散ビーム砲を。

【ズビィィィ!】

『うわあああ!』

接近していた2機のザクが消滅し、残ったのは1機だけだった。

『なんだこれは!?!?化け物だ!!強すぎる!!』

「逃がさねえよ!!そらあああ!」

ラナロウのトルネードガンダムは一気にザクとの距離を詰め、ビームサーベルで頭から竹割りにして破壊した。

「あとはムサイ!」

ラナロウの肉眼に2隻のムサイが移る。

「メガ粒子砲!!撃て!」

そこにキャリアベースからの攻撃が開始される。キャリアベースの

攻撃はムサイの横に反れたしかしその瞬間回避行動に専念したムサイからビームによる弾幕が無くなってしまふ。

「うおおおおっ!!!」

ペダルを強く踏み込んでスラスタを全快に開き、一気にムサイとの距離を詰めたラナロウは。背後を大量の大型ミサイルが追い掛けてくる、しかしラナロウは気にもせず、そのままのスピードでムサイの下に潜り込んだ。

「なに!? うわああ!!!」

一隻のムサイは自らのミサイルの直撃により大破し大爆発を起こす。

「後ひとつ!!!」

ラナロウは一気に隣のムサイに接近する。

「うて!!! 撃墜しろっ!!!」

ムサイのビーム砲の火線がラナロウのトルネードガンダムへと迫る。しかしトルネードガンダムは素早くムサイの下に滑り込む。

「不便だよなあ…下に武装のねえ艦はよお!!!」

ムサイのブリッジを下方へ潜り込んだラナロウは、腹部から拡散ビーム砲を至近距離で発射し、ブリッジを破壊しムサイの機能を奪った。

「こちらラナロウ、ジオン公国の部隊の殲滅を確認」

ラナロウは辺りを見回し生存反応を確認する。

「ご苦労だったラナロウ君」

ゼノンからの無線が入り、ラナロウはグローブの握りを確認する。

「別に、雑魚相手だしな…」

生体反応を示すアラートがコクピット内に鳴り響き、ラナロウは画面に目を向ける。画面には白旗を振るジオンの宇宙服がいた。

「おやおや」

ラナロウは残忍な笑みを浮かべ、回線を全回線に切り替えた。

「ジオン公国軍の兵士たちに告げる。俺は、連邦地球軍のラナロウ・シェイド、君たちにお願いがあ。お願いを聞いてくれるのであれば、貴君らを殺したりはしない」

「ラナロウ君！？何を！？」

突然のラナロウの行動に困惑したニキが叫ぶ、しかしラナロウは画面越しで口に入差し指を立てる。

「お願いというのは、我が艦における物資の供給だ、そうすれば俺は君たちを見逃そう」

その浮かれた声色は医務室のエリス達にも聞こえていた。

「彼は何を言っているの？」

そこにマークがやってくる。慌てた様子ではあるがその顔は頭痛による苦痛で歪んでいた。

「マーク！」

マリアはそんなマークに駆け寄り肩を貸す。

「俺はいい…ラナロウを…あいつを止める…！」

マークは何かを知っている口振りで叫んだ。大分頭痛が治まってきたエリスは立ち上がるとマークの側に寄り添う。

「どっついう事？」

マリアは状況を確認しようと聞き入り、マークは目を逸らした。

「…奴は物資を奪い、脱出ポットに乗った彼らを殺害するつもりさ」

マークの言葉にマリアは蒼白となって手を離してしまい。マークは床に膝砕けになって座り込む。

「…そっ…それはっ…」

俄かに信じがたいマークの言葉にマリアは動揺を示した。

「それは…海賊行為よ!!!? そんな事を…」

「あいつは傭兵だ…傭兵は機密主義な連中が自分を知った人間達を生かしておくと思うのか!?!」

マリアの言葉をマークは怒鳴りたててかき消し、次にエリスに首を向ける。

「良く聞け…無闇な殺生はウォーズブレイクを引き起こし、あらたな黒歴史を生む事になる…」

「ウォーズ…ブレイク?…」

「ジェネレーションフォースの役割は、黒歴史内に我々の記憶を残し、あつては成らない物を始末しなければならぬんだ…確かに人を殺す内容でもある」

マークは額についた冷や汗を拭う。

「だが…黒歴史だつて歴史だ…無闇にその時代の人間を殺せば、後の歴史に存在しなかった事になってしまうんだ…それがウォーズブレイク…歴史のズレさ…」

「ウォーズブレイクしたら…どうなるんですか?」

「月光蝶は我らにペナルティをかす、一説によると月光蝶により選ばれた兵士が現れ試練を与えられている。」

エリスはすっかり頭痛が無くなっていた。それよりも走りだしていた。真つ直ぐにドックへ。

「エリス！なにやってんだ！！」

ケイに呼び止められる。が…エリスは素早くデッキに上がりコクピットに乗り込んで起動させた。

「2号機でできます！！」

「なんだとお？出るつつたつて」

「早くハッチを開けてください！！」

エリスはコクピットから叫び、ビームライフルをとると前に向かう。

「唐突だなあおい…」

ケイは、頭をかいて唾然としていた。

「ケイ君」

そこにゼノンからの通信と同時にモニターに顔が現れる。

「艦長！」

ケイは思わず帽子を脱いでしまう。

「ブリッジで2号機の起動を確認した、どうかしたかのかね？」

するとエリスが回線に割り込んでくる。

「いまラナロウさんがあの人たちを討つたら、ウォーズブレイクしちゃうかも知れないですよね!？」

エリスの叫びにゼノンの顔色が変わる。

「ウォーズブレイク？」

ニキもゼノンに顔を向ける。ゼノンは小さく頷いた。

「その通りだ…」

そして、ゼノンは重い口を開いた。

「しかしエリス君、君の正義感は大したものだ…だが君はそのMSに乗って外へ出たとたん、真正正銘、ジェネレーションフォースに配属されることとなる…良いのかな？」

その言葉にエリスは一瞬思考が止まる。そうだった…自分は帰りたかったのだ。しかし自分は今ここにいる。そして覚悟を決めるのも早かった。

「行きますッ！」

エリスの決意にゼノンは頷いた。

「後部ハッチから出る！ラナロウ君を止めてくれ！抵抗した場合は頭部を壊してくれて構わん！」

ゼノンの命令にエリスは頷き後部ハッチへ向かう。

「頭部破壊だあ！？おいおい！メカニックの仕事を増やすんじゃないえ！！！」

「艦長命令だ！」

「マジかよ……」

乗り気しないケイはとぼとぼ端末に向かうしかし端末のまえには……。

「ハッチ開放……！！！」

クレアが元気良く端末を叩いていた。

「ちょ……！クレア……！？あたしまで宇宙へ放り出す気か……！！！」

ケイは慌て端末のある部屋に飛び込み、同時に後部のハッチが解放される。

「ばかやろう……！殺す気か……！！！」

ケイはクレアに走りその頭に拳骨を叩き落とした。

「エリス・クロード！トルネードガンダム2号機！発進します……！！！」

エリスは開けられたハッチから宇宙へと出た。

「く…機体が重いッ…」

重力落下による身体の重みを感じたエリスは、シユミレーションと現実とのギャップに戸惑いをながらもペダルを踏み込み、スラストを吹かせた。

「これで全部かな？」

ラナロウの前には、コンテナ2つ分の物資と2機のザク？を涵獲していた。ムサイの下に取り付けられたコムサイという脱出用シャトルもスタンバイされておりなかには兵士が見える。

「そうか…じゃあ…」

ラナロウはジオン兵士たちが乗る脱出コムサイを撃とうとビームライフルを構えた。

「やめてー！ー！ー！」

鋭い少女の声が、ラナロウの耳を貫き、それがラナロウの気を一瞬逸らした。

【ドォン！ー！】

エリスの乗る2号機が1号機に体当たりし、1号機は空間に投げ出される。

「なにしゃがる！ー！てめえ！ー！」

「早く逃げて下さい!!」

ラナロウを無視したエリスは、声いっばいに張り上げて叫び。エリスの声にジオンの兵士たちは慌て、コムサイにのりこみ発進してしまふ。

「てめえ!!裏切りやがったのか!!」

ラナロウは怒りでビームライフルをエリスに向ける。

「わたしは裏切ってなんていません!あなたの行為は…」

【ズギュン】

ラナロウは容赦なくビームライフルを発射し、エリスは機体を横にずらしてビームをすれすれに回避する事に成功したエリスは戦慄を覚えた。

「な!…なにを!?!」

「裏切り者が!オレに説教たれんじゃねー!!!!」

ラナロウは怒りで我を忘れていた。ビームライフルぶを撃ちまくりエリスを攻撃する。

「2号機にシヨンベン臭え臭いがついただろ!?!そのコクピットはビームライフルで除菌してやるよ!!?!てめえごとな!!」

支離滅裂な事をいいながらビームライフルを撃ちまくりガトリング  
ガンを乱射する。

「二人の戦闘！終わりません！！」

シールドが叫びに、ニキはため息を漏らした。

「戦争は遊びではないというのに…エリス！さっさと制圧しなさい  
！」

ニキの命令を受けたエリスは一気に接近する。

「な！！！」

驚くラナロウだがエリスは気にしない。

「この！！わからず屋ー！！！」

エリスのトルネードガンダムの回転回し蹴りがラナロウのコクピッ  
トを叩いてぶっ飛ばす。

「…ニキさん！」

その時、ブリッジの通信副座席にいたレイチエルがレーダーを見て  
叫んだ。

「レーダーに感？まさか…ここにはもう一隻艦がいたというの？…」

呼ばれてニキはリーダーを確認に向かう。

「…まさか……」

ゼノンが声を漏らしてニキ達は一斉に注目する。そしてこの宙域を思い出した。

「しまった!!」

ゼノンは慌てるように立ち上がりリーダーに目を向ける。

「二人に高速で接近する気鋭が有ります!速い……」

シエルドの声にゼノンは顔面蒼白となった。

「それは【赤い彗星】だ!!二人を下がらせる!!やられるぞ!!」

ゼノンの声にブリッジクルーは一斉に騒めく。

「こいつ!!舐めやがって!!」

ブリッジの騒ぎ等、知る由もないラナロウはエリスにビームライフルを向ける。

【ムブム】

同時に叫ぶ警報音にエリスは素早く反応した。

「ラナロウさん!!」

叫ぶが間に合わない。上から飛んできたのは炎の玉のようだった。

【ドォン！！】

爆発と同時にラナロウのトルネードガンダムの右腕が大破する。

「ぐああ！！」

衝撃に声を挙げるラナロウ、エリスはすぐ様接近して1号機を掴み体勢を崩させないように引き寄せた。

「大丈夫ですか！？ラナロウさん！！」

「てめえエリス！やりやがったな！！よくも！！」

そこへニキからの通信が入る。

「二人とも落ち着きなさい！！新手よ！！」

「何いつ！？」

ラナロウとエリスは同時に上を見た。そこには赤いザクが1機、バズーカを片手に見下ろしている。

「白い奴の次は青い奴か…わたしは運がいい…」

赤いザクのコクピットの中で男はそう呟く。…そして

「見せてもらおうか…青い奴の性能とやらを!!」

真っ直ぐに突っ込んできた、男の名前は「シャア・アズナブル」ジ  
オンの【赤い彗星】とよばれるエースパイロットとの遭遇、エリス  
の人生で最初のピンチの訪れであった。

## EP - 4【赤い彗星】（前書き）

宇宙世紀0079へと介入したエリス達は、ジオン公国軍の部隊と遭遇し戦闘へと突入する。原因不明の頭痛に悩まされたクルー達は絶体絶命の危機に陥る。しかしジエネレーションフォースパイロット。ラナロウ・シェイドの活躍で事無くを得たと思われた…が…

## EP - 4【赤い彗星】

赤いザクは真っ直ぐブーストして突っ込んできた。

「くっ！」

エリスはラナロウの機体をブーストで押し出し、赤いザクを正面からぶつかり合う。

【ドオン！】

「が……………かはっ！！！」

凄まじい衝撃がエリスの全身を打ち付け、エリスは肺から息を吐き出し、そのまま機体ごと吹き飛ばされる。

「エリスー！！！」

ラナロウは叫び、残った左手から格納されたガトリングガンを取り出し赤いザクに撃ちまくる。

「ラナロウ君気を付けて！！それはジオンの【赤い彗星】！！エースパイロットよ！！！」

ニキの切羽詰まった声がコクピットに響く。

「見りゃわかるよ！エリス！！起きろエリス！！！」

しかしエリスからの返事はない。その間にもバズーカの弾をラナロ

ウの機体に放つザク。

「んな攻撃!!」

ラナロウは腹部の拡散ビーム砲を撃ちバズーカの弾を撃墜する。

「拡散するビームだと?...ねえい!!」

シヤアのザクは一気に下降してビーム火線を避けてラナロウに向かう。

「ち...エリス!!とつとと起きろ!!やられちまうぞ!!」

「青い奴の片方は死んだか...ならば!!」

一気に接近しようとするザクにラナロウは左手腕部ガトリングガンを撃ちまくり弾幕を展開する。

「腕部にガトリングガンを搭載しているのか...白い奴とは違うな」

ザクは突然足のスラスターを使い高度を揺らめかせ、火線の下をくぐり抜けラナロウの機体に迫る。

「なめんなあああ!!」

ラナロウの機体は潜り抜けてきたザクへと蹴りを放つがそれも避けられ、ザクはヒートホークを引き抜いて振り上げる。

「んなつ!!」

ラナロウの顔が驚きに見開かれる。

「終わりだ!!青い奴!!」

振り下ろそうとするビートホーク、しかし…

【ピピピ…!】

弾けるような音を鳴らすアラート音、シャアは目を疑った。

「何!?!」

そこには猛スピードで脱出シャトルが突っ込んできていた。

「ええい!!」

シャアはラナロウに振り下ろそうとしていたビートホークをシャトルに振るいシャトルを破壊する。

「このやるおおっ!!」

ラナロウは再びガトリングガンを撃ちまくれば、シャアのザクは距離を取り当たらない。

『ラナロウ!距離を取り時間を稼げ!!』

ラナロウの耳にマークの声が響く。見れば二人のパイロットスーツ

がザクへ向かっていた。

少し前

「赤い彗星と遭遇しただと!!?」

マークはモニターに映されたゼノンに向かって叫び MARIA に抑えられる。

「今はラナロウ君が交戦してる」

「ならなんで援護しない!二人はまだ宇宙での戦闘はシュミレーションしかこなしてないんだぞ!?勝てるわけがない!!」

「マーク!!」

MARIAはマークを黙らせゼノンを見た。ゼノンは首を横に振る。

「相手は赤い彗星だ、こんな戦艦などではすぐに撃沈させられてしまっただろう艦は動けん」

「なら!二人を見捨てるというのか!!?ふざけるな!!」

マークは柄にもなく怒鳴りたててモニターを叩く。

「艦長!あきらめるにや速いぜ!!」

そこにケイが割り込む。

「どつ言うことだ?ケイ」

マークは椅子に座り聞く姿勢になる。

「簡単さ、ラナロウの破壊したムサイの近くには物資とザクが2機漂ってる…」

マークとマリアは顔を見合わせる。

「…しかし、どうやってそこまでいくの？いま二人と赤い彗星は交戦してるんでしょ？」

マリアの不安気な表情をみたケイは不気味に笑った。

「脱出用のシャトルは用意した…後は当たって砕ける？オーバー？」

モニターに写し出されたシャトル、マークはそれを見るなり立ち上がる。

「マーク!？」

動揺したマリアは立ち上がりマークを止めようとする。しかしマークは何も言わない。

「わかった…付き合いますよ」

マリアは意図を汲み取り溜め息を吐き出した。

「よし!行くぞ!」

場面は戻り

「時間稼ぎつつあってよ!!!オイコラ!!!エリスー!!!」

ラナロウはガトリングガンをばらまき、高機動で動き回る赤い彗星のザクを追い掛けた。

「済まないなマリア、特使の君を戦わせる事になるなんて…」

マークはザクのコクピットでパラメーターを調整しながら呟いた。

「もう慣れましたよ、軍の時からあなたはいつもそうでしたから…」

マリアは既に調整を済ませ起動のタイミングを伺っていた。

「起動と同時にバーニア全開」

「タイミングは任せます」

マリアはヘルメットの無線を聞きながら目を閉じ、集中する。

「早くしてくれ!もう…」

そんなラナロウの足をシャアのザクが放ったバズーカが吹き飛ばす。

「うわあああつ!」

ラナロウの機体が大きく揺れて飛んでゆく。その時、シャアは戦いながら考えていた。

「…先程の無人のシャトルは一体なんだった…」

シヤアは自分の経験から答えを探す。

「わたしの機体にダメージを与え、鈍らせるための攻撃？」

最初に頭に浮かんできた作戦を口に出す。

「否 違うな、それならばシャトルに爆薬を積んでいる筈だ……」

次に目の前を飛びかう半壊状態のトルネードガンダムを見る。

「あの機体を逃がす為のブラフとは考えられん……」

そしてそのモニターの端にザクが映る。

「まさかっ……!?!?」

「いまだ……!?!」

同時に2機のザクが起動し、ランドセルのバーニアを全開に真っ直ぐ進む。

「ち……!?!やはりか……!?!」

シヤアはバズーカを2機に放った。轟音とともに迫る火の玉。

「マリア！フォーメーション！コークスクリュー……!?!」

「了解……!?!」

マリアとマークのザクは背を合わせクルクルとローリングをし始めるとそのままバズーカの弾を弾いて避け、弾かれたバズーカは空間で爆発しその威力で2機のスピードが増す。

「バカな！？バズーカの弾を弾くだっ！？」

驚きに目を見開くシャア、その間にもマリアとマークのザクは回転しながらシャアへ迫る。

「背中を借りるぞマリア！！」

「了解どうぞ！！」

息のあった二人のザクは少し離れ、マリアのザクが減速し、マークのザクはマリアのバーニア、文字通り背中を蹴り、離れる。

「困む気か！？やらせるかっ！」

シャアの視線はマークに向かう。

「マリア！！」

同時にマリアのザクがマシンガンを放つ。

「何！？…」

不意を突かれたシャアだったが、両足のバーニアを使い体を回すようにしてマシンガンを右足に擦らせて避け、バズーカをマリアのザクに向ける。

「こつちだ！」

そこでマークのザクが背後から体当たりをぶつける。

【ドオン】

激しい衝撃にシャアのザクが吹き飛びコクピットのシャアに凄まじい衝撃を浴びせる。

「味な真似をッ！」

シャアのザクは判定せずに前にいるマリアに向かって進み、ヒートホークを振り抜いた。

「マリア!!」

完全に不意をつかれたマークは出遅れる。

「バカに…するなあああ!!」

マリアのザクはマシンガンを捨てて正面からシャアのザクに迎え撃つ。

「マリア止せ!! やめろおお!!」

マークの声を耳にするも、マリアのザクはシャアのザクに組み付いた。

「ええい！！何の真似だ！？」

動揺を見せるシャアだったが、直ぐに組み付いたザクを剥がそうとする。しかしザクは離れずバーニアを全開に開く。

「バーニアを開いた！？やつめ…道連れにするきか！？そうはいかん！！！」

エリスは、うつすらと目を覚ました。急にザワザワとした胸騒ぎがしたからだ、モニターを見る。赤いザクと緑のザクが組み付いて光っている。それがバーニアの光である事はすぐにわかった。何故？エリスは虚ろな意識の中で思う。しかし頭が痛い。見れば重力で自分の血が舞っていた。頭を打つたのだ…そうエリスは思った。

『起きなさい…エリス』

暖かい女の声が耳に響いた。

「だれ？」

エリスの視界がぼやけ、そこに女が現れる。俄かに信じがたい怪現象に、エリスは目を凝らす。女は幻ではなかった、モニターに写し出されているのだ。

『わたしは…【アプロ…】…ジェネレーション…の端末…』

ぼやけた画面の女の声は、エリスの耳には聞こえなかった。しかし…はつきり聞こえた言葉がある。

【あなたに種を授けましょう】

「マリアー……!!」

マークの声でエリスは現実突き戻される。同時に緑のザクが赤いザクに斧で両断され、光のたまになった。

「このやろおおっ!!」

マークの声と共にもう1機のザクが向かって行く。

「まりあ…さんが？」

エリスの胸を凄まじい痛みとマークの憤りの騒つきが駆け巡る。そして、マリアの顔が走馬灯のように流れ、エリスの瞳から涙が溢れた。

「おおおお!!!!」

怒りに身を任せたマークはヒートホークを振り抜きシャアのザクに斬り掛かる。しかしシャアのザクは素早く身を横へ反らして後ろに回る。

「しまった!!」

マークにはスローに映る、赤いザクがマシンガンホルダーから外して構える姿が。

「うわあああっ!!!!」

途端、動かなかったエリスのトルネードガンダムが動き、バーニアを全開にして一気にシャアのザクに迫った。

「なにっ!？」

完全に不意を突かれたシャアは見事にエリスの体当たりを受ける。

「青い奴が生き返っただと…ぐ!!ええい!!」

衝撃緩和のエアバックが顔に直撃するもはねのけ、エリスを引き剥がそうとする。

「お前なんか!お前なんか!!お前なんかああ!!」

その瞬間、エリスの頭の中で種が弾けた。

エリスのトルネードガンダムは自らシャアのザクを尻ぎ払い、尻ぎ払ったザクのバックパックを掴んで振り向かせ、手にしていたマシンガンを掴んで奪って投げ捨て、ヒートホークを抜くしのザクの手首を掴んでそのまま握り潰し、そしてシャアのザクの頭に拳を打ち込み掴んで排気官を引き契る。

「こいつ!急に動きが…!!」

シャアは苦し紛れにトルネードガンダムから離れようとするれば、今度はコクピットめがけて蹴りがとんできて直撃する。

「うわああっ!…ば…化け物か!？」

シャアのザクは解放されて空間を飛んでいき、それから反転するど、  
一目散に逃げていった。

「逃がすかあああ!!」

エリスはビームライフルを引き抜き、シャアの逃げた方向に撃ちまくった。

「エリス!!」

そのモニターにマリアが映る。

「え?」

啞然とするエリス、モニター越しにマリアは健在を見せていた。

「なん…で?」

「ザクを捨てて脱出したのさ…こいつ」

モニターのマリアの隣でラナロウが頭に腕を組んで寝ていた。

「バカかお前!!」

マークが無線に割り込み、怒鳴った。

「それよりエリス！！あの赤い彗星をボコボコにしちゃうなんて凄いわよ！！」

マリアは興奮した様子で、モニターに顔を寄せる。

「え？…いえ、もう無我夢中で…」

「諸君話はそれくらいで良いかな？」

そこにゼノンの通信が入る。

「赤い彗星は去ったにしろ、まだ付近にジオンや連邦がいるかもしれん…速やかに機体と物資を回収し…この場を離脱する！いいな！」

「了解」

こうしてエリスの人生最初の危機は去った、しかしこの危機はあくまで最初に過ぎないのだった…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2268z/>

---

機動戦士ガンダムGGENERATION-月光蝶の羽音

2011年12月10日22時50分発行